初代 神野金之助（かみの きんの すけ）

資性温厚、夙（つと）に意を開墾事業に注ぐ

－世紀の大事業、神野新田の開発－

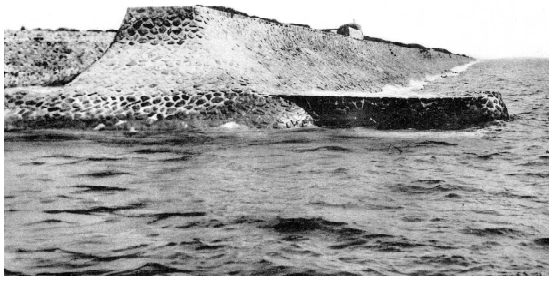
神野金之助（1849 ～ 1922）
出典：『神野金之助重行』1940

初代神野金之助（幼名岸郎）は、1849（嘉永2）年4月15日に、父神野金平と母マツ子の五男として、尾張国海西郡江西村（現、愛西市江西町）誕生した。神野家は代々この付近の庄屋を務める豪農であり、1864（元治元）年16歳で家督を相続し、苗字帯刀を許され、金之助と称した。初代は神野を「じんの」と称していたが、二代目の時に「かみの」と読みを変えている。1876（明治9）年戸長を辞して、父兄の紅葉屋の業務を手伝い、当時としては珍しい舶来品を扱うなど新時代の先端を行くものであった。その利得は金融で運転し、更に土地経営・山林事業に進み、遂に新田開発にまで進展した。また、神野が創立または経営した会社は明治銀行のほか多数あり、当時の名古屋の街の発展の核となった路面電車を運行した名古屋電気鉄道会社（現名古屋鉄道）などの社長を務めるなど中部経済界で中心的役割を果たした。

■新田の開発に乗り出す

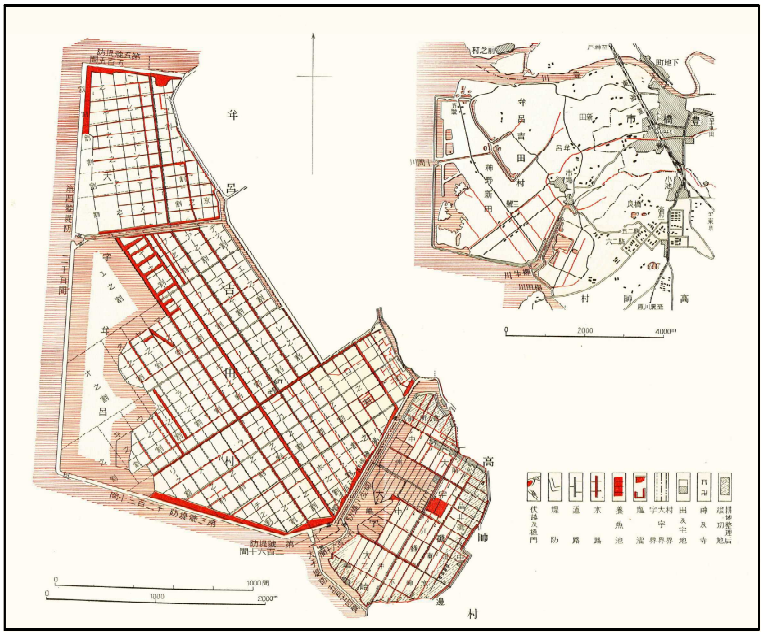
三河国渥美郡吉田村、高師（たかし）村（現豊橋市）地先に突出の洲があった。この洲の開発を最初に手掛けたのは、山口藩老の毛利祥久（もうりよしひさ）によって行われ、1887（明治20）年、まず加茂用水を延長して新田までの用水路が築造された。1888（明治21）年新田の築堤工事を開始し、1889（明治22）年7月澪留（みおどめ）が完成するも同年9月の未曽有の大津波で堤防が破壊される。その後も1891（明治24）年10月の濃尾地震、1892（明治25）年9月の暴風雨により堤防が壊滅し、復旧のめどが立たず、毛利は新田開発を断念した。

1893（明治26）年4月、神野金之助は毛利祥久より、毛利新田と牟呂（むろ）用水を41,000円で購入する。神野は、工事請負人に人造石工法の開発者服部長七（はつとりちょうしち）を選び、工事に先立ち服部とともに購入した土地を視察し、堤防の破壊は堤体の低いこと等が原因として堤体の高さを二丈四尺（約7.2m）とした。下部一丈八尺（約5.5m）までは33°40′の勾配とし、その上部六尺（約1.8m）は63°30′の勾配とするなど波浪の観察も詳細に行った。新田は、人造石工法で施工され、干拓面積10,908,700㎡（千百町歩）、干拓堤防の総延長は12㌔（約3里）に及び、新田用の牟呂用水の修復も行われ、1896（明治29）年4月、神野新田（じんのしんでん）が完成する。



神野新田干拓堤防　出典：『神野金之助重行』1940

人造石の堅牢性の調査が1918（大正7）年4月、愛知県土木課長などにより、5号樋門（ひもん）を試験的に破壊して行われ、その結果、危険個所は無く、人造石樋門の堅牢性が確認された。



神野新田全図　出典：『神野金之助重行』1940

神野は、新田入植者への援助を惜しむことはなかった。塩分の多い干拓地の入植者に対し、潮田の農耕の指導に必要な農事試験場の設置、農事指導主事の導入、農事研究会の設置、新田内に7か所の苗代場を設けた。また、牟呂用水が豊川筋の大氾濫などにより水路が破壊された時、全水路の修復工事を人造石工法で行っている。これにより用水路の水量が増大し、新田の塩分除去も良好となった。牟呂用水の豊橋市大西地区に豊橋電燈会社の牟呂発電所が1896（明治29）年に建設され、発電事業にも利用された。

（井土清司）